

罪人、されど自分を受け入れる

皆さんは自分が好きですか。それとも嫌いですか。キリスト教では人間は罪人であるとされていますから、そればかり説教の中で強調してお話ししていると、皆さん自分が嫌いになってしまうのではないかと実は心配しています。かつてイエス様は、「隣人を自分のように愛しなさい」と言われました。これは自分を愛しているのが前提になっている言葉です。確かに人間は罪人である、その自覚は大切。しかし神様はそのような罪人である人間もイエス・キリストの贖いのゆえに無条件で御自分の子として愛し、受け入れ給う。それゆえ、そのように神様に愛されてある自分を愛することも大切なこと。これがキリスト教の考え方ではないでしょうか。とはいえ、何かと人と比べられることの多い今の世の中、そのように自分を愛すること、また自己肯定感を持つことは簡単なことではありません。弱さと罪、欠けに溢れた自分をどのように受け入れてキリスト者として歩んでいけばよいか、今日はこのことをお話ししていきたいと考えています。

さて、そんな今日は聖書の中からヨハネによる福音書21:1～14を取り上げさせていただきました。イエス様がティベリアス湖畔、すなわちガリラヤ湖畔で、七人の弟子たちに復活したその姿を現された場面です。この直前の箇所、ヨハネによる福音書20:19～31には、弟子たちがエルサレムで復活のイエス様に会った場面が記されています。このようにエルサレムで復活のイエス様に会った弟子たちの多くは、その後、エルサレムから彼らの故郷であるガリラヤへと帰って行ったのでしょう。シモン・ペトロとディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子の七人がガリラヤ湖畔に一緒にいました。

すると、食べる物が必要になったのでしょう、シモン・ペトロが元漁師としての経験を活かして「わたしは漁に行く」と言うと、他の皆も「わたしたちも一緒に行こう」と言い出して、彼らは皆で漁をすることになりました。しかし、彼らが夜通し頑張っても、何の収穫も得ることができなかったのです。けれども、夜が明けた頃、ある人

物が岸に立っていて、舟の右側に網を打つよう弟子たちに命じました。その声には何とも言えない威厳があり、弟子たちがその人物の言う通りに網を打つと、元漁師としての知識と経験を活かしても何の収穫も得ることができなかったのに、たちまち網を引き上げられないほどの大漁となりました。こうした経験は、ペトロたちに、自分がイエス様に召された時の経験、すなわち、ルカによる福音書5:1～11に記されている経験を思い出させるものでした。それで、愛弟子を初めとして、彼らは岸に立っていた人物がイエス様であると気付いていくのです。

こうした漁のお話は、「人間を取る漁」、すなわち宣教のことを象徴しています。ヨハネによる福音書20:21で復活したイエス様は、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」と述べ、弟子たちに聖霊を与えて、弟子たちを福音宣教へとお遣わしになりましたが、このようにして復活の主に遣わされていく福音宣教がどのような結果になっていくかが今日の聖書箇所のお話で暗に語られているのです。弟子たちはこれから漁へ、人間を取る漁へ、すなわち福音宣教へと船出していきます。本日の聖書箇所「夜」と言うのは、イエス様不在の時を暗示しています。イエス様に信頼しない、イエス様不在の宣教は、いくら人間の知識と経験があつたとしても何の実りも結ばないことが語られています。しかしながら、復活のイエス様に信頼するならば、復活のイエス様が共にいてくださるならば、夥しいほどの豊かな収穫を得るであろうことがここで預言され、約束されているのです。

21:11には、「シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった」と記されていますが、この「百五十三匹」という数字が何を意味しているかについては様々な説があります。たとえば、アウグスティヌスは、『百五十三』という数は、一から十七までの自然数を全部足した合計である。そして十七は、律法の数である十に聖霊の賜物を指す恵みの数である七を加えたものである。従って『百五十三』は、律法と恵みによってキリストに導かれるすべての人を意味する」と解釈しましたし、ヒエロニムスは、「百五十三」という数字に関して、「当時地中海に棲息していた魚で知られていたものが百五十三種類であった。それ

ゆえ、ここはすべての魚が漁獲として与えられたということであり、イエス・キリストの十字架において裂かれた体によってすべての人類が伝道の網、救いの網に一杯に満たされるということ象徴している」と解釈しています。いずれにしても、魚が福音の宣教によって救われる人を、網が神の国を象徴していることは疑いないでしょう。

今日の聖書箇所では、弟子たち、教会の福音宣教という人間を神の国に取り入れる働きが、復活した偉大な神様であるイエス様によって祝福され、必ず大成功し、大きなびっくりするほどの豊かな実り、人間の常識では考えられないほどの豊かな収穫が与えられるということが、象徴的に約束されています。また、イエス様が炭火を起こし、朝食の準備をして、陸に上がって来た弟子たちを食卓に招かれたという記事も、とても大きな意味を持っています。このように豊かな宣教の収穫の祝福と約束を与えてくださるイエス様が、私たちが日々食卓に招き、霊的に養ってくださることが象徴的に語られているのです。私たち、聖餐式のたびに、この恵みを感謝したいと願います。

さて、今日の聖書箇所でこのように福音宣教の成功が約束、預言されていた通り、その後キリスト教は世界中に広まっています。聖書を読んでも、この後弟子たちが聖霊降臨の出来事を経験し、各地に教会を建て上げ、様々な苦難に出会いながらも神様に導かれて宣教に励み、福音が広がっていく様子が描かれています。しかし私は、こうした実り豊かな福音宣教に遣わされていた人々が誰も罪を、また弱さと欠けを抱えていたことに注目したいのです。

今日の聖書箇所に出てくるペトロも、他の弟子たちも、皆イエス様の十字架を前に逃げ出してしまった人々です。ペトロなんて本当に人間くさい。しょっちゅうイエス様に叱られていましたし、十字架を前に逃げ出したどころか、「お前もイエスの仲間だろう」と身分がばれてしまいそうになって、3度も「違う」、「そんな人知らない」とイエス様のことを否認してしまう。復活の主に出会ってやり直しのチャンスをもたらしたとはいえ、その罪や弱さ、欠けが劇的に無くなったということではもちろんなかった

でしょう。その罪や弱さ、欠けを抱えたまま、弟子たちは復活の主に導かれてこの世に船出して行ったのです。そして、実り豊かな宣教を行っていった。ペトロもイエス様から「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」と言われていた通り、初代教皇として教会の礎を築いていきました。

こうした事実から思うのは、宣教というのは欠けのない、聖人のような人でなければできないというようなものでは決してないということです。宣教の主体はあくまでも復活の主であられる。復活の主が私たちの弱さや欠け、罪をも豊かに用いて豊かな実り、収穫を生み出していってくださるのだ。私はそう思います。

何度も言いますように、私たちは皆罪人であり、弱さも欠けも抱えた存在です。良い所もちろんありますが、悪いところもたくさんある。聖人のように神様の御心に適うこと、人に愛を行うことができたかと思えば、状況によっては悪魔のような顔が出て、神様の御心に反することをしてしまうこともしょっちゅうあるわけです。自分を振り返れば、私たち人間と言うのが本当にグレーでドロドロした存在であることに嫌が上でも気づかされます。でも復活の主はそんなドロドロした罪人をこそ、他でもない私たちをこそ、この世の御自分の宣教に豊かにお遣わしになるのです。

なぜか。それはドロドロした部分をたくさん持った罪人だからこそ、同じドロドロした部分をたくさん持った罪人の現実、ドロドロした現実に共感することができるからでしょう。キリスト教というのはできもしない綺麗な理想ばかりを語って、それを上から押し付ける宗教では決してありません。人間の弱さや欠け、汚いドロドロした罪の現実を経験として本当によく知っています。他でもないイエス様が、その人間のドロドロした罪によって殺されてしまったわけですから。ある意味ではキリスト教以上に人間の罪を経験として知っている宗教もないだろうと言えるかもしれません。キリスト教はその罪の現実にとことん向き合った上で、救いというものを語っていく宗教です。そしてそのためには、自らも罪の現実の渦中にいて、それを本当によく理解できる、共感できる存在でなければならないのでしょう。

ここで皆さんにお聞きしますが、牧師というのは罪から遠い存在であるとどこかで思っておられないでしょうか。確かに牧師は「聖職者」とも呼ばれますから、そのような罪から遠い聖い存在というイメージを持たれている方もおられるかもしれません。しかしイメージを壊して申し訳ないですけども、牧師も一人の罪人です。ある意味では他人以上に人の罪を真正面から受けやすい職業でもありますので、むしろ他人以上に自分の弱さや欠け、罪が露骨に出やすい職業でもあると私は感じています。

私自身振り返っても、たとえば教会の外の会議などで感情むき出しにひどいことを言われて、こちらも感情的になって醜い口論をしてしまったりと、「ああ、未熟だなあ」、「恥ずかしいなあ」と思った経験はたくさんあります。その都度穴があつたら入りたい気持ちになるのですが、しかし考えてみればそういう人間のドロドロした部分と言いますか、弱さや欠け、罪を抱えているからこそ、同じ弱さや欠け、罪を抱えた人々に共感し、寄り添うことができているのだし、そう思えば決して罪というのも悪いことばかりではないと言いますか、罪を抱えているからあなたはもうだめなのだという単純な決めつけはできないということに気づかされます。

罪人だからこそ、同じ罪人に寄り添える。だから復活の主は罪人である弟子たちをこの世にお遣わしになりましたし、今も罪人である私たちを御自分の愛を伝える器としてお選びになるのかなと思われました。主のもとで自分の弱さも欠けも、罪も豊かに用いられる。そういう不思議さ、奥深さが宣教にはあるような気がいたします。

結局人間の最終的な評価は、人間には下せないのでしょうか。今日の招詞の言葉にありましたように、「わたしを裁くのは主なのです。ですから、主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。」しかし、これだけは確かです。イエス・キリストの贖いのゆえに、私たちは終わりの日、「神からおほめにあずかります」。他でもない神様が私たちをそのままで良しとしてくださるのです。

この神様の愛のもと、自分の弱さや欠け、罪に気付いてそれを直していこうとする

のはとても大切なこと。しかしその一方で、弱さや欠け、罪があるからと言って自分を単純に否定することは止めましょう。それらも神様の御用のために用いられるのですから。イエス・キリストのゆえに自分はそのままで受け入れられている。愛されている。その神様の愛のもとまずはしっかりと自分を受け入れて愛していきたいと願います。そしてそこから己の弱さや欠け、罪と向き合ってそれを大切にしていきたいと願います。今週も復活の主と共に己の弱さや欠け、罪、それらがもたらす共感の心で人を捕らえていく漁に皆で一緒に船出して行きましょう。

お祈りをいたします。 ——以下、祈祷——